

国語科における言語文化教育のための教材化例（Ⅰ）

伊坂 淳一

A Sample of Teaching Materials of Japanese Language Culture Education (Ⅰ)

ISAKA Junichi

要約

平成30年版高等学校学習指導要領（国語）における科目再編によって、「国語総合」に代わる新科目「現代の国語」、「言語文化」が創成された。古典を「読む」ことが古典文法や古語の意味、漢文訓読のきまりや漢文特有の語法の暗記などに実質的に終始しているこれまでの「古典学習」から、我が国の言語文化の価値や意義を感受することを中心とする「言語文化の学習」へと転換する必要がある。また、文学について学ぶことを主たる目的とする「文学教育」や古典について学ぶ「古典教育」から、文学素材、古典素材を通して言語を使った理解や思考、表現をする力を身に付けさせる「言葉の教育」へと転換する必要がある。そのためには、いわゆる古典文学、近代文学、現代文学という文学研究における研究分野の区分を国語教育の大前提としないこと、さらに、古典文学作品は古典原文でなく、主として作家による創造的な現代語訳で読むことに躊躇しないこと、そして、作品そのものの詳細な読解に向かうのではなく、複数の作品を比べて読み、自由に考えて論述することを学習の中心に据えるべきことが必要となる。その教材化例の一端を提言するものであり、志賀直哉「清兵衛と瓢箪」、岸田今日子「冬休みに あった人」及び『堤中納言物語』所収の「虫めづる姫君」の冒頭部分の中島京子による現代語訳「虫好きのお姫様」を比べて読み、作中人物の何かしらに対するこだわりの差違を論述する課題を提案する。

キーワード：国語科、言語文化、文学作品の教材化、比べ読み、人物像

1. はじめに

本稿の筆者は以前に次の論考（以下、「前稿」という。）を発表している。

伊坂淳一「国語科における言語文化教材の射程」〔『敬愛大学教育学会紀要』創刊号 2022年2月〕

そこでは次のような趣旨を述べた。

平成30年版高等学校学習指導要領（国語）における科目再編によって新科目となった「言語文化」科目は、従来のいわゆる文学教育、古典教育の枠組みを越える新しい発想が必要である。言語文化教育のための教材として、半ば暗黙の合意とされてきた個別の文学

作品の内容理解を目的化した指導やいわゆる原作主義から脱却し、翻案・翻作や二次創作などを射程に入れて主教材とした、言語文化全体を見据えた素材を教材化するという視点を持たなければならない。そうすることによって、我が国の言語文化の継承と再生の意義を理解し、その価値を感得する学習へと転換することが可能となるだろう。

そのうえで、実際の教材化例として、次の2例をあげた。ただし、いずれも紙幅の関係により十分な説明を施すことができなかった。

(1) 教材化例1

- ①「鉈切の神の大蛇退治―千葉県館山市の民話より―（現代に伝わる民話を採集したもの）
- ②「スサノヲ、出雲に行く」（『古事記』（奈良時代）上巻の神話の現代語訳）
- ③「猿神を生け贅の男にこらしめられる話」（『今昔物語集』（平安時代末期）第26巻第8話の説話の現代語訳）

以上の3編について、「物語の構成や展開のうえでどのような共通点があるだろうか。また、成立した時代やジャンルが異なる三編の話に、共通する点があるのはなぜだろうか。」という問いかけによる読み比べの課題を提示した。

(2) 教材化例2

- ①「とり所なきもの」（現代の女性随筆家による『枕草子』（平安時代の随筆）第141段の現代語訳）
- ②「『女同士』というもの」（①の現代語訳者である女性随筆家による『枕草子』についての評論）
- ③酒井順子『枕草子RIMIX』（上記の評論に対する別の現代女性作家による書評）

以上の3編から、②を手がかりとして①を解釈しながら読むこと、及び③が②をどのように評価しているかを考えることを課題として提示した。

本稿においてはあらたな教材化例を提示しつつ、現代、古典の壁を越えて、包括的な視点から読み比べをすることにより、言語文化の新しい教材化の可能性を模索すること。

・古典は原作の古典原文に拘泥せず現代語訳で読むことによって、従来から批判されてきた表面的な現代語訳作成を中心とした学習の超克を

めざすこと。

の意義を主張したい。ただし、前稿においては、翻作や翻案、二次創作を積極的に教材として活用すること。

も中心的な提言であったが、本稿ではこれには触れない。

2. 新しい視点に立つ言語文化教材によって身に付ける国語の力

物語・小説の教材によって身に付ける国語の力、また、古典の教材によって身に付ける国語の力とは何か、をめぐってはこれまでもさまざまな主張がなされてきた。この「国語の力」という部分を「読解力」、「言語力」と言いかえても、また、「思考力・判断力・表現力」、さらには「資質・能力」と言いかえても同じである。

授業の方法・過程とそれがめざす国語の力との関係も、さまざまに主張されてきたように見える。ここでは次の研究を例としてあげる。

犬飼 2022は、文学における「読み」の枠組み、授業における読み方の視点について、「時代とともに作家論、作品論、テクスト論へと移り変わってきた」と述べている（犬飼 2022, p.14）。一方、阿部 2020は、「構造よみ・形象よみ・吟味よみ」という3つの指導過程によって3つの国語の力をつけるのだという主張をしている（阿部 2020, pp.25-29）。

平成30年版高等学校学習指導要領（国語）において、新科目の「言語文化」の指導事項について、「我が国の言語文化に関する事項」と「読むこと」の指導事項のみを取り上げると次のようになる。ここでは「言語活動例」は措くこととする。

【我が国の言語文化に関する事項】

○伝統的な言語文化

ア 我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解すること。

イ 古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解すること。

ウ 古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解すること。

○言葉の由来や変化、多様性

エ 時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解すること。

オ 言文一致体や和漢混交文など歴史的な文体の変化について理解を深めること。

○読書

カ 我が国の言語文化への理解につながる読書の意義と効用について理解を深めること。

【読むこと】

○構成と内容の把握

ア 文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えること。

○精査・解釈①

イ 作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈すること。

○精査・解釈②

ウ 文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価すること。

○精査・解釈③

エ 作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めること。

○考えの形成、共有

オ 作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもつこと。

前稿の教材化例 1 に示した課題は、

【我が国の言語文化に関する事項】 イ

【読むこと】 ア・エ

に関わるテキスト論、構造よみ・形象よみを核としたものであるといえる。また、教材化例 2 に示した課題は、

【我が国の言語文化に関する事項】 カ

【読むこと】 イ・エ・オ

に関わる作品論、吟味よみを核としているといえる。

素材そのものからではなく、課題の内容によって、学習指導要領の指導事項とのひもづけや読み方の方法、指導過程が異なることになる。同じ素

材でも課題の設定によって、他の指導事項や読み方、指導過程に関係づけることが可能である。つまり、どの素材をどのように組合せて提示するかは、学習指導要領の指導事項の選択や読み方、指導過程、目標とする国語の力を拘束するものでは原則としてない。

しかしながら、それぞれの 3 編の素材を組合せたのは、やはり提示した課題を想定したものである。本稿で示す教材化例においても、素材の選択・組合せと課題設定は表裏一体の関係にある。その意味で、本稿の筆者は、新しい視点からの素材の発掘とその組合せによって、言語文化の新しい学び方を提案することをめざしている。そして、ここで身に付けたい国語の力とは、

○我が国の言語文化の特質について自分なりに考え、自分のものの見方を深める力。

○自分なりに考えたことを的確に、また、効果的に言葉で表現する力。

に核があると考えている。

3. 本稿が提案する教材化例

本稿において提案する教材化例を本稿末尾から逆方向に縦書き・右開きによって示した。ここに採録した素材は次の 3 編である。

①志賀直哉「清兵衛と瓢箪」(全文)

②岸田今日子「冬休みにあった人」(全文)

③中島京子訳「虫好きのお姫様」(『堤中納言物語』所収の「虫めづる姫君」の冒頭部分の現代語訳)

①は旧「国語総合」の教科書数種において採録されていた素材である。②は全く新しい素材である。③は古典原文が旧「古典Ⅰ」「古典Ⅱ」に高い頻度で採録されていた素材であるが、現代語訳、それも現代の作家による創造的な現代語訳を積極的に取り上げた点が本稿の筆者の意図である。

本稿の教材化例を貫くテーマは、標題の「人物像を捉える」ことである。前稿の教材化例 1 は作品の「構成・展開」の比較にあったが、ここでは「人物像」の比較が主題である。それぞれの登場人物は「何かしらにこだわりを持つ人物」という共通点を持つ。しかし、そのこだわりの理由や動機において少しずつ異なる。古典と近代、現代

の壁を越えて取り上げて比較する点に、本稿の筆者の作為がある。

本稿では①～③のそれぞれの素材に、次のような固有の課題（教材化例中の用語としては「読み方のポイント」）を付した。

①清兵衛と瓢箪

- 1 普通の少年とは異なる清兵衛の言動を取り出そう。
- 2 「清兵衛の父」、「受け持ちの教員」はどのような気性や考えの持ち主だろうか。また、清兵衛は彼らに対してどう思っているのだろうか。自分の考えを文章にまとめよう。

②「冬休みにあった人」

- 1 次の表現から、①は木島先生、②は「ぼく」がなぜそのように思ったかを想像して文章にまとめよう。
 - ① 木島先生は泣きなくなってきた。
 - ② ぼくはお母さんがとてもきれいだと思います。
- 2 最後の一文はどのように読んだらいいだろうか。自分の考えを文章にまとめよう。

③「虫好きのお姫様」

- 1 姫君はどのような性格や趣向の持ち主であるか、行動や発言を抜き出しながらまとめよう。
- 2 両親や周囲の人々は姫君のことをどのように思っていたらだろうか、行動や発言を抜き出しながらまとめよう。

ここではいわゆる詳細な読みの課題ということではなく、それぞれの人物像についての理解や想像、さらにその論述につながるようにというねらいをもった課題を設定した。なお、前稿の教材化例1、教材化例2においても、個々の素材に固有の課題を想定していたのだが、紙幅の関係で掲載を割愛せざるを得なかった。

本稿では①～③の各素材の個別の課題をふまえ、①～③を通して考えたい課題を次のように設定した。

課題1 「清兵衛と瓢箪」の清兵衛、「冬休みにあった人」の木島先生、「虫好きのお姫様」の按察使の大納言の娘のそれぞれのこだわり方の違い、特にその動機の違い

について考え、自分の考えをまとめよう。

課題2 「清兵衛と瓢箪」の清兵衛、冬休みにあった人」の木島先生、「虫好きのお姫様」の按察使の大納言の娘の中で、友だちになってもよいと思える人はいるだろうか。その理由とともに自由に自分の思いを書こう。

課題1は本稿の教材化例のテーマをそのまま具体化したものである。課題2は作品を自分とはかけ離れた世界のものとしてでなく、自分の身近なもの、自分が作中人物とどのような関わりを持てるか、という可能性を自由に考えるというのが意図である。

課題2のみならず、課題1についても論述のしかたは自由という意図を持っている。本稿の筆者は、読者の視点に立った、次のような見解を持っている。

「清兵衛と瓢箪」の清兵衛は、家族や先生といった周囲の大人から望まれる姿に反抗し、子どもなりにも自分が熱中できる何かを求めて模索している。それはまだ子どもらしい迷いの中にあるので、こだわりの対象は変わっていく。

「冬休み あった人」の木島先生は教師としての理想にこだわっている。自分が教えている子どもたちの理想の姿を、さらにはそれを指導している教師としての自分の姿を現実と比較している。

「虫好きのお姫様」の按察使の大納言の娘は既成の価値観、社会から求められる思考・行動の様式への反発にこだわっている。また、それが人為的に整えられ、維持されてきた制度とは対極にある、現代的な用語でいえば自然科学的な真実へのこだわりを持っている。

いわゆる文学研究者による最新研究には拘泥しない立場である。もちろん学習者の読み方や考え、思いを本稿の筆者の解釈に誘導する意図はないし、文学研究者の研究成果としての見解をいわば正解として示す意図もない。言語によって表現された素材をもとに、さまざまな考えや思いを自由に持ち、それを根拠をもっとも効果的に表現する力を付けさせることが、言葉の学習としての国語科の責務であると考えている。

4. おわりに

くりかえしになるが、本稿の筆者は第一に古典を「読む」ことが古典文法や古語の意味、漢文訓読のきまりや漢文特有の語法の暗記などに実質的に終始しているこれまでの「古典学習」から、我が国の言語文化の価値や意義を感受することを中心とする「言語文化の学習」に転換することの必要性を主張してきた。また、文学について学ぶことを主たる目的と考える傾向にある「文学教育」や古典について学ぶ「古典教育」から、文学素材、古典素材を通して言語を使った理解や思考、表現をする力を身に付けさせる「言葉の教育」への転換の必要性を主張してきた。

そのために、いわゆる古典文学、近代文学、現代文学という文学研究における研究分野の区分を国語教育の大前提としないこと、古典文学作品は古典原文でなく、主として作家による創造的な現代語訳で読むことに躊躇しないこと、さらに、作品そのものの詳細な読解に向かうのではなく、複数の作品を比べて読みながら自由に考えて論述する

ことを学習の中心に据えるべきこと、これらがこれからの我が国の言語文化の教育にとって必要なことであると考えている。本稿においては、その教材化例の一端を提案した。

参考文献

- 阿部登 2020『増補改訂版 国語力をつける物語・小説の「読み」の授業』明治図書出版
犬飼龍馬 2022『中学校・高等学校国語科「読解方略」習得ワーク&指導アイディア』明治図書出版

参考資料

- 文部科学省告示「高等学校学習指導要領」2018年
文部科学省「高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説（国語編）」2018年

素材としての文学作品素材

- 志賀直哉「清兵衛と瓢箪」〔志賀直哉『清兵衛と瓢箪 小僧の神様』集英社 1992年、初出は『読売新聞』1913年12月〕
岸田今日子「冬休みにあった人」〔江坂遊編『30の神品 ショートショート傑作編』扶桑社 2016年、初出は 岸田今日子『ラストシーン』角川書店 1989年〕
中島京子訳「虫好きのお姫様」〔森見登美彦・他校注・訳『日本文学全集03 竹取物語 伊勢物語 堤中納言物語 土佐日記 更級日記』河出書房新社 2016年〕

など言つて笑う。

「嫌ねえ、姫って、眉もまるで毛虫じやない」

「それでもって、歯ぐきは、毛皮を剥いた芋虫ってこと」

他の女房たちも言いたい放題。そこへ左近という女房がやつてきた。

冬くれば衣たのもし寒くとも羽毛虫多く見ゆるあたりは

——冬になりや暖かいわよ毛がいつばい 見てよこの部屋毛虫がいつばい

「いつそ着物なんか着なくたつていいんじゃないの」

などと言いつけると、ことうさい先輩女房がやつてきて、

「お若い方々、何事ですか、騒々しい。嫌々好きのお姫様なんて、ちつともよくはありませんよ、まったく感

心しませんね。いいですか、毛虫を嫌うように愛でると言ってるんじゃないのよ、うちの姫様

がおつしやるのは、脱皮のことですよ。その過程を研究していらつしやるんです。お考えが深いじやありませんか。嫌々なんでもは、捕まえること、手に鱗粉がついて、なんとも気持ち悪いものです。嫌は捕まえること

とおりの病を引きおこすともいじやないの。ああもう、縁起が悪いつたらないわねえ」

とまで言うので、若い女房たちは余計に憎たらしくなつてきて、きんさん陰口を叩くことになるのだった。

虫たちを捕まえる重には、なんでも欲しいがるものを姫様が与えるので重たちは見た目の奇怪な虫たちを、あれこれ集めては差し上げている。

「毛虫はねえ、毛並みはおもしろいんだけど、歌や故事を思ひ出すすがににならないから、物足りないわ」

姫様はそう言つて、かまきりやかたつむりなどをとり集めて、それらに関する詩歌を大声で歌わせて鑑賞し、

姫様自身も、

「蠅牛ノオ、何事ヲカフ、争フウ」

などと、白楽天の詩を声張り上げて詠唱したりする。

童たちの名前も、ありきたりではつまらないからというので、虫の名前をつた。ケラ男、ヒキ魔、カナヘビ、

イナゴ魔、雨彦などつけて、召し使つていた。

読み方のポイント

1 姫君はどのような性格や趣向の持ち主であるか、行動や発言を抜き出しながらまとめよう。

2 両親や周囲の人は姫君のどのようなように思つていたのだろうか、行動や発言を抜き出しながらまとめよう。

冬くれば……〔新編日本古典文学全集の現代語訳〕冬が来ると着物だけは十分あとと

頼みにできる。寒くても毛虫のたくさんいるこの御殿では、

子どもに多い熱病の一つ。嫌の

縁粉が原因ではない。

おこりの病

歌

よすが

白樂天

ケラ男、ヒキ魔、カナヘビ、イナゴ魔、雨彦

それそれ、おけら、ひきえるなどを連想させる名前。『カナヘビ』は『暖中納言物語』の原文では「いなかたち」とあり、はつきりわかつていない。

中島千子 小説家、随筆家、一九六四年『なつめとむら』(二〇一〇年)で芥川賞を受賞。『なつめとむら』(二〇一二年)で泉鏡花文学賞を受賞。

【出典】森見登美彦・他『日本文学全集03 竹取物語 伊勢物語 源中納言物語 土佐日記 更級日記』河出書房新社、二〇一六年。

行った、親の気持ちを踏みにじることになりはしないかと気がついた時、木島先生はほんとうにどうしたらいいか判断がなくなって、涙がにじんできた。次に取り上げた作文は、だから字が汚いためばかりではなかっただけで、うつつと読んで見た。先生は気を取り直して読みはじめた。

冬休みにあつた人

五年 黒田幸一

あと三日で冬休みが終るのに、ぼくはまだ、だれにもあつてなくて、こまつたな思っているとお母さんが「幸一、そちゃんのお母さんにきいたけど、だれかにいって作文を書くんだって」と言いました。お母さんは、お母さんの下うけの仕事でいそがしくて、どこにも行けないのはわかってるから、いつもあつてる人でもないんだよ」と言うのと「じゃあだれのことでもいいのかい」と言うので、でも、今まで知らなかったことが見つからなくちゃだめなんだ」と言いました。お母さんは「ふん」と言って、仕事をしつついました。とうとう冬休みは今日でおわるのでぼくはうしろと思いが作文を出して、いたら、お母さんがいきなり「幸一、お母さんは人ろしなんだよ」と言いました。「うそだ」と言うと「ほんとうだよ」と言いました。「ううして」と言ったら「幸一がおとなになればわかるよ。お父さんがねるときに母さん一人で首をしめてね、いわいさんと二人でうめたんだよ」と言いました。いわいさんとゆうのは、町のこうじけんばではたいていいてときどきあそびに来るおじさんです。それからお母さんは「おかしいね、はなしやつてよかったような気がするよ」と言つて、ちよつとわりました。ぼくはお母さんがともきれいだと思ひました。それからお母さんは「でもこのことは、作文に書くだけで、先生と幸一といわいさんとお母さん、四人だけのひみつだよ」と言いました。ぼくはよくそくしました。だから先生もよくそくしてください。

木島先生は読み終ると、三重丸を花びらで取り巻いて花丸を描いた。それから感想を書いた。「自分の『番そば』にいる人について書いたことも、幸一くんがこれだけ想像力を働かせたことも、すばらしいと思います。もう少し漢字が使えたらよかったですわね。」

そして、次の作文を取り上げた。期待していたものに近い作文があった。一篇でもあつたことで、飛び上がりたいほど嬉しい気持ちだった。この村にもおそい春が来て雪がほとんど溶けた頃、お稲荷さんの鳥居の横から野良犬の死体を掘り出して食べているのを、学校帰りの子供が見つけた。

読み方のポイント

- 1 次の段落から、①は木島先生、②は「ぼく」がなぜそのように思ったかを想像して文章にまとめよう。
- ① 木島先生はぼくがともきれいだと思ひました。
- ② ぼくはお母さんがともきれいだと思ひました。
- 2 最後の一文はどのように読んだらいいだろうか、自分の考えを文章にまとめよう。

3 虫好きのお姫様

▼「堀中納言物語」(享安時代後期以降)の中の短編物語の現代語訳
作者兼訳 中島京子・訳

蝶々好きのお姫様の邸の隣に、按察使の大納言の娘が住んでいた。他の姫様とははべものにならないほどに、両親がそれはいせつに育てていた。

「世間の人々が、蝶々、花よと、もてはやすのは、あさはかであつともないことよ。人というものは、誠意があつて、本質を追い求めこそ、立派な心映えと思われむ」

そして、見るもおそろしげな虫をあれこれ集めて、「これが、成長する状態を観察します」と、とりどりの虫籠に入れて眺める。

「毛虫が思慮深そうにしている姿って、心打たれるわね」
朝晩、髪を無造作に耳ひっかけ、毛虫を手の平に乗せてかわいがり、飽かず見守っていた。

若い女房たちはおじけつて困惑しているの、物おじしな、身分のあまり高くない男の輩を召し寄せて、箱の虫たちを扱わせ、名前を訊いたり、新しい名前をつけたらして、楽しんでいる。

「人間、表面をとりつくろふちや、だめ」という信条で、眉毛などもいっこうに抜かない。お歯黒も、「めんどくさい。それに汚い」と、つけず、笑えばまっ白な歯のぞき、虫たちばかりを朝な夕なに愛でている。女房たちが怖がつて逃げ出すと、姫様の部屋はものすごい騒ぎになったものだ。こして怖がる者たちを、

「どうしようもないわね、はしたないつたら」

と、毛深い眉をしかめて睨みつけるので、女房たちは身の置きどころのない思いをしていた。

両親は、「少しは変わり者で、姫君らしくない」とは思うものの、「きつと何か悟っていることもあるんだらう。妙なもんだ、姫のためを思つて言つて聞かせても、深く遠慮しないようなことを答えてくるから、わが娘ながら近づきたい」

と、娘に会うのも、気が重い様子。

「しかし、なんというか、人間が嫌いではないか、ふつうの人間は、見た目の美しさを好むものだらう。『薄気味』の悪い毛虫をおもひがつていそう」などと、世の人の耳に入るのは、ほんとうにみつともないことなんだぞ」

「気にしません。森羅万象を探究して、その行く末を見届けてこそ、事の成り立ちがわかるのです。見た目で評価するなんて、なんて拙いの。毛虫はね、蝶になるんですよ」

と、ちよつと変化するときを、虫籠から取り出して見せてくれる始末。

「だつて、人々が着用するものでしょう。要は、また羽も生えなうから糸を作り出すのに、蝶々になつてしまつたら、何もできない。毛虫にとってはびらびらした死装束を着たも同然。すつかり役立たずになつてしまうのよ」

これで返す言葉もなく、あきれんかいないのだつた。

その上、両親とも几帳端しに對面する陳苦しさで「鬼と女とは、人前に出ないほうがいい」と独自の哲学がある様子。母屋の廊を少し巻上げて、几帳を押し出し、得意げに理屈をこねている。

若い女房たちは姫様の言葉を聞いて、

「たいそう毛虫を持ち上げているけれど、はつきり言つて頭がおかしくなりそうだわ、あのお遊びときたら」

「蝶々好きのお隣のお姫様にお仕えしてる女房たちって、幸運よねえ」

と言ひ合う。兵衛という女房が、

いかでそれとかむかたなくいてしかな鳥毛虫なが見るわざはせじ

——どうしたら姫を説得できるのか、毛虫は一度と見るものも嫌よ

と言えば、小太婦という女房が笑つて、

うらやまし花や蝶々と言ふめれし鳥毛虫くさきよをも見るかな

——うらやまし花や蝶々と遊ぶ人、毛虫まみれの世を見ていると

按察使の大納言 地方の行政官の業務を調査、監査する官職の名。

身の重 身分の低い男の世間人。

眉毛を抜き、歯に黒のお歯黒をけることが、当時少女にあってふつうの身だしなみであつた。

森羅万象 この世界に存在するすべての事物や現象。

死装束 死者に着せる衣裳。

羽の開き切り 羽の開き切り。

竹や藁なるを細く作つた部屋の開き切り。



『新編日本古典文学全集』高倉物語 堀中納言物語 (小学館 2000年)より転載

いれわね…… 『新編日本古典文学全集の現代語訳』でうかがへは姫君に道理を説いたものの、姫君はついつい毛虫のまじくはあはれまじい、いつかは飛ぶと信じていた。

人物像をとらえる

- ① 清兵衛と瓢箪 (志賀直哉の小説)
② 冬休みにあつた人 (世田今日子の小説)

虫好きのお姫様 (中島京子による平安時代後期以降に成立した物語の現代語訳) を読みます。

それぞれに何かしらにこだわりを持った人物が登場するといふ共通点があります。描かれた人物像を比べながら捉え、そのこだわりの持ち方、その人物像を言い表す言葉の探方を見つけていきましょう。
①③の後にある「読み方のポイント」について考えたとで、次の課題について自分の考えをまとめましょう。書き出す前に友達と意見を交流してもよいでしょう。

- 課題1 「清兵衛と瓢箪」の清兵衛、冬休みにあつた人」の本島先生「虫好きのお姫様」の「按察使の大納言の娘」のそれぞれのこだわり方の違い、特にその動機の違いについて考え、自分の考えをまとめよう。
課題2 「清兵衛と瓢箪」の清兵衛「冬休みにあつた人」の本島先生「虫好きのお姫様」の按察使の大納言の娘の中で、友だちになつてもいいと思える人はいるだろうか。その理由とともに自由に自分の思いを書こう。

1 清兵衛と瓢箪

▼近代(大正時代)の小説
志賀直哉

これは清兵衛という子どもと瓢箪の話である。このできごと以来、清兵衛と瓢箪とは縁が切れてしまったが、間もなく清兵衛には瓢箪に代わるものがあった。それは絵を描くことで、彼は絵で瓢箪に熱中したように今はそれに熱中している……。

清兵衛が時々瓢箪を買って来ることは両親も知っていた。三、四銭から十五銭くらいまでの皮つきの瓢箪を十ほども持つていたろう。彼はその口を切ることも種を出すこともとりで上手にやつた。絵も自分で作った。最初、茶碗で臭みを抜くと、それから父の飲みあました酒を貯えおいて、それでしきりに磨いていた。全く清兵衛の凝りようは烈しかった。ある日、彼はやはり瓢箪のことを考えおぼろけを歩いている。ふと、眼に入つた物がある。彼ははっとした。それは路端に海を背にしてズラリと並んだ服店台の一つから飛び出して来た爺さんの頭頂であった。清兵衛はそれを瓢箪だと思ったのである。

「立派な瓢箪じゃ。」
こう思いながら彼はしばらく気がつかずにいた。――気がついて、さすがに自分で驚いた。その爺さんはいい色をした茶頭を振り立てて向こうの横町へ入って行った。清兵衛は急におかしくなつて一人大きな声を出して笑つた。たまたまなく笑いながら彼は半町ほど駆け出した。それでもまだ笑いはいはなれなかつた。これはどの凝りようだったか、彼は町を歩いていけば、骨董屋でも八百屋でも荒物屋でも駄菓子屋でも、また専門でそれを売る家でも、おおよそ瓢箪を下げた店はいえぬ。その前に立つてじつと見。清兵衛は十二歳でまだ小学校に通っている。彼は学校から帰つてくると、ほかの子どもも遊ぶずに、一人よく町へ瓢箪を見に出かけた。そして、夜は茶の間の隅にあらをかがいて、瓢箪の手入れをしていた。手入れがすむと酒を入れて、手ぬぐいで巻いて、缶にしまつて、それごといたつへ入れて、そして寝た。翌朝は起き

瓢箪 ウリ科の一年生つる草。果実が成熟すると果皮は非常に堅くなるので、酒や水の容器として利用される。喜望をつくるには、完熟した果実の口で部分だけ穴をあけて水に浸し、果肉を腐せて水に溶け出すのを除いたのち、洗って乾燥させる。



①よたんの前衛 (Byōgen) 江戸の転写。瓢箪の形を、鉄は、円の分の。青銅。町は一九二〇年。余少額のある、茶品や食品を売る。日常で生活する様々な用品を売る。店主は子どもを対象にした安易な販路を築く店。

①よたんの前衛 (Byōgen) 江戸の転写。瓢箪の形を、鉄は、円の分の。青銅。町は一九二〇年。余少額のある、茶品や食品を売る。日常で生活する様々な用品を売る。店主は子どもを対象にした安易な販路を築く店。

るとすぐに彼は畑をあけて見る。瓢箪の肌はすっかり汗をかいている。彼は飽かずそれを眺めた。それから丁寧に糸をかけて畑のあたる軒へ下げ、そして学校へ出かけて行った。

清兵衛のいる町は商業地で船つき場、市にはなつていたが、わりに小さな土地で二十分歩けば細長い市のその長い方が通り抜けるくらいであった。だからたとえ瓢箪を売る家ばかり多くあつたにしろ、ほとんど毎日それらを見歩いている清兵衛には、おそろくすべての瓢箪は目を通されていろう。

彼は古瓢にはあまり興味を持たなかつた。いまだ口も切つてないような皮つきに興味を持っていた。しかも彼の持つているのはおおかたいわゆる瓢箪形の、わりに平凡な格好をした物ばかりであつた。

「子供じゃい、瓢箪いうたら、こういうでなかにやあに人らんと見えるけう。」
大工をしている彼の父を訪ねてきた客が、そばで清兵衛が熱心にそれを磨いているのを見ながら、こう言つた。彼の父は、
「子供に癖に瓢箪いじりなぞをしおつて……」

と苦々しうに、その方を睨みた。

「清公、そんな面白くないのばかり、えつと持つとつてもあかんぜ、もちつと寄敷なんを買わんかいな」と客が言つた。清兵衛は、
「こういふがえんじや。」

と答えてすましていた。

清兵衛の父と客との話は瓢箪のことになつていつた。

「この春の品評会に参考品で出ちよつた馬琴の瓢箪というやつはすばらしいもんじやつたのう。」と清兵衛の父が言つた。

「えらいでええ瓢箪じやつたけのう。」

「でけえし、だいぶ良かった。」

こんな話を聞きながら、清兵衛は心で笑つていた。馬琴の瓢箪というのはその時の評判な物ではあつたが、彼はちよつと見ると、――馬琴という人間も何者だか知らなかつたし――すぐくだらない物だと思つてその場を去つてしまつた。

「あの瓢箪はわたしには面白くなかつた。かさばつとるだけじや。」
彼はこう口を入れた。
それを聴くと彼の父は、目を丸くして怒つた。
「何じや。わかりもせんくせして、黙つとれい！」
清兵衛は黙つてしまつた。
ある日清兵衛が裏道で歩いていて、いつも見慣れない場所に、仕舞屋の格子先に婆さんが干柿や蜜柑の店を出して、その後ろの格子に二十ばかりの瓢箪を下けておくのを発見した。彼はすぐ、「ちよつと、見せてつかあせえな。」と寄つて、「一つ」見た。中に「一つ、五寸ばかりで、一見く普通な形をしたので、彼には驚いたほどいいのがあつた。」
彼は胸をどきどきさせて、
「これなんぼかいな。」
とさいてみた。婆さんは、
「ばうさんじやい、十銭にまけときやんじやう。」
と答えた。彼は息をはずませながら、
「そしたら、さつと誰に売らなうとい、つかあせえのう。すぐ銭持つて来やんすけえ。」
くぐく、これを言つて走つて帰つていつた。

間もなく、赤い顔をしてハアハアいながら還つてくると、それを受け取つてまた走つて帰つていつた。彼はそれから、その瓢箪が離せなくなつた。学校へも持つて行くようになった。しほには時間中でも机の下でそれを磨いていることがあつた。それを受け持った教員が見つけた。修業の時間だつただけに教員はいつそ怒つた。

よから来て、この土地の人間が瓢箪などに興味を持つことが、ぜんたい気に食わなかつたのである。この教員は武士道で言うこの好きな男で、雲井衛門が来れば、いつもは通り抜けるさえ恐れている新地の芝居小屋に、四日の興行を三日曜きに行くくらいだから、生徒が運動場でそれを喰うことにはそれほど怒

飽かず 飽きもしないで。

古瓢 加工済みの古い瓢箪。

じやいけえ 方言で「だから、」
いふたら 方言で「いったら、」
なかにやあ 方言で「なかに、」
けのう 方言で「のなか、」

えつと 方言で「たくさん、」
あかぢや 方言で「よくない、」
えんじや 方言で「いいの、」

出ちよつた 方言で「出ている、」
馬琴 漢沢(たそむ) 馬琴(二七七年―一八四八年)、江戸時代後期の戯作文字の作家。

わし 方言で「私、」子どもも使。

仕舞屋 開店していない普通の家。

つかあせえな 方言で「くだないな、」

五寸 一寸は約二、三センチメートル。

なんぼ 方言で「いく、」

ばうさん 小、男の子。
まけときやんじやう 方言で「まけましよ、」

修業 明治十七年から昭和二十年まで行われた旧制学校の教師の一つ。志孝・勤能などの題目をんだ。

雲井衛門 横町軒右衛門(ちやうけん、もへん)。明治・大正時代の著名な浪曲師。